研究委員会企画シンポジウム 1

「性差」をどうとらえ、扱うか

— 性別二元性を問う —

Rethinking Sexual Dichotomy

Takako YUKAWA, Keiko TAKAHASHI, Masuo OBINATA, Syoko SASAKI AND Keiko KASHIWAGI

司会者 湯川 隆子 (三重大大学)
企画者 湯川 隆子 (三重大大学)
高橋 恵子 (聖心女子大学)
話題提供者 帯刀 益夫 (東北大学)
佐々木 掌子 (立教女学院短期大学)
柏木 恵子 (東京女子大学)

る発達心理学の立場、遺伝子(G)と環境要因(E)双方がせめぎ合うとみられる性の臨床心理学の立場、の3つの提言をもとに議論を深めたい。

話題提供 I

生命科学からの発達心理学へのアプローチ

帯刀 益夫

1. 個性や思考、行動と遺伝子のはたらき

21世紀の初頭、人類はヒトのゲノムの全情報の解読をするまでに至り、ヒトは2万個の遺伝子の統合的な制御のもとで、生存を維持し子孫を増やすことがわかった。世界中の人々は、ゲノムの細部では一人一人に違いがあり、個々人のゲノムの違いが、個性や思考、行動、病気へのかかりやすさなどにどのように反映されるかに興味向けられるようになってきた。また、ヒトの遺伝子の進化では、自然選択とともに人為的環境(文化)による選択が大きな効果をもっている。「性差」も、このような遺伝子の特性と進化の背景を持っている。

本シンポジウムでは遺伝子研究の歴史に簡単に触れた後で、とくに発達心理学と関係の深い言語機能と遺伝子の関係について紹介した。英国の言語障害の家系の分析から、言語機能と関係の深い遺伝子としてFoxp2とよぶ遺伝子が特定された。この遺伝子は鳴鳥やマウスなどの実験から、会話の発声の制御に働いていることがわかった。Foxp2は遺伝子発現を制御する転写因子とよぶタンパク質であり、ヒトとチンパンジーでは2つのアミノ酸の違いがあり、その差が、進化的にヒトが言語機構を獲得するのに重要だったことがわかってきた。Foxp2は言語機能と関係する脳神経回路形成に働く遺伝子群を制御しており、これらの遺伝子の中には、ほかの言語障害の原因遺伝子や自閉症と関係する遺伝子などが含まれていて、言語機構

企画の趣旨

「性差」をどうとらえ、どう扱うのがよいのか。男女の差別解消や男女共同参画などのアファーマティブ・アクションにおいても、性認識や性別役割などを心理学が問題にするときにも、あるいは、同性愛や性同一性障害を性的マイノリティと見るときにも、基盤にあるのは「性別二元性」である。

しかし現在、性差とはなにか、性別はどのように出現するかについての生命科学の知見が増え、また、LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender) などの多様な性を社会が認めるようになってきた。つまり、性差の根拠とされる「性別二元性」の科学的事実の存否(真偽)が問われているのである。

本シンポジウムでは、性差について改めてその根拠や意味を理論的・研究的な視座から問い、それを教育や実践につなげるにはどのような枠組や視点に立った研究を展開していく必要があるかを考える。

現在、発達科学では、遺伝子と環境の相互作用(GxE)が指摘され、活発な議論が続けられている。性・性差についても、生命科学がさまざまな証拠を出してきており、性差の根拠とされている性別二元性の問題もこのような視点からの吟味が不可欠になっているといえる。

そこで今回は、主に遺伝子(G)の働きや仕組みについての研究を展開している生命科学の立場、文化や教育といった社会化としての環境要因(E)を重視す

の生物学的特性が明らかになってきた。さらに、最新のラットなどの研究から、Foxp2は新生仔の雌雄で発現の差があり、それが母親との会話能力の性差となっており、ヒトの子どもの言語獲得での性差とも関係がありそうな観察が報告されている。

2. エピジェネティックな制御

現代の生物学では、遺伝的特性とともに、エピジェネティックな効果（環境と遺伝子の相互作用）が注目されるようになった。人間の発達には、新生児が体の成長と呼応しながら、環境との相互作用により、さまざまな特性に分化して特化、限定しながら、その統合としての心理・行動で幅のある個性を獲得してゆく過程とみなすことができる。

言語機能の遺伝子の発見のように、思考や行動などがその基盤として遺伝子ネットワークを中心とする制御システムとして理解されるようになると、発達する子どもの心理学的観察とその背景にある思考や行動の生物学的原理を対応させながら、教育などの環境がどのように遺伝子システムに働きかけるかを分析することにより、正しい発展が期待できるだろう。

エピジェネティックな制御は、個体の遺伝子制御の限界を広げ、多様な環境変化がおこす選択圧の変化に対応するような緩衝作用を示すことで、生物の生存戦略に効果的に働くとともに、人間の可能性を広げ、環境に対する人間の自由度も拡大できるという恩恵をもたらす。発達心理学や教育心理学が扱う課題は、まさにエピジェネティックな制御の上にあるといってもよいだろう。

3. 生物学的に規定される性差

生物学的には、「性差」は「生殖」という生命体の維持継承の上から進化的に優位性を持って維持されていたものであり、体の違いを示す「性徴」だけでなく、子育てなどの行動上でも、その生物学的な差は明確なものである。また、とくに、胎児期、子育てでのゲノム・インプリンティングの効果など、「性差」のエピジェネティックな制御も重要である。最近の研究では、体から取り出された細胞でも、性ホルモンの作用などがない状態で、ストレスに対する応答性や代謝経路などに雌雄差があることがはっきりしている。そこで、「性差」の問題は、生物学的特性の差（区別）と、社会的に作られた「性」（差別）とを混同せずに、科学的な判断をすることが望まれる。

4. これからの課題

ゲノムの時代における心理・行動遺伝学研究は、病気の原因遺伝子を同定し、その結果を基に、個々人の

遺伝的特性を考慮した治療（テーラーメイド医療）を目指すゲノム医学研究とよく似ている。心理・行動遺伝学研究もこれからは、こうした心理・行動に関わる遺伝子を追跡し、個々人の遺伝的特性に合わせた教育方法を考える方向に向かうのではないだろうか。心理・行動に関わる遺伝子制御を知ることは、人の自由度が遺伝子に呪縛されると考えるより、環境（教育）に対する人間の自由度を拡大し、人間の可能性を広げるのに役立つと考えるのが妥当であるし、「性差」も同じ研究方向が必要だろう。

その意味で、今後、心理学と生命科学の2つの領域の研究者が互いに対話する機会を設け、新しい境界領域の研究を共同して進めてゆくことが望ましい。それは、「心理・行動」や「生物学」という学問領域の研究の発展だけでなく、統合的な「人間」を理解するための科学へ向かう第一歩になるはずである。

参考文献

- 帯刀益夫 (2010). われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか ハヤカワ書房
- Bowers J. M., Perez-Pouchoulen M., Edwards N. S., & McCarthy M. M. (2013). Foxp2 mediates sex differences in ultrasonic vocalization by rat pups and directs order of maternal retrieval. *Journal of Neuroscience*, **33**, 3276-3283.
- Pollitzer, E. (2013). Cell sex matter. *Nature*, **500**, 23-24.

話題提供II

性同一性障害から考える性差

佐々木 掌子

性同一性障害（Gender identity disorder：以下GID）とは、出生時に割り当てられた性別に対する違和感とそれとは異なる性別に対する強く持続的な帰属を示すために社会的機能が低下すると下される精神疾患名である。それを示す割合に性比（性差）があることはしばしば報告されてきたが、この原因の探求は、生物学的要因、文化的要因、心理社会的要因など、さまざまな領域から検討を要する課題である。本シンポジウムでは、心理社会的要因のうち、異性役割行動への社会の不寛容性に対する性差を取り上げる。

1. 思春期および小児期・青年期における GID に関する行動評定尺度と臨床データの性比逆転

性別違和感を訴えて来院した初診患者の性比が年齢によって異なる場合、それを誘引する要因が年齢と性別によって異なることが予測される。行動評定で性別違和や異性化願望を測定すると、就学前から青年期にかけて一貫して女子の得点が高い（佐々木・野中・尾崎・高橋・敷島・山形・安藤, 2009 ; Zucker et al., 1997）傾向がある。しかし、クリニック来院者としては、思春期前の場合、カナダで 5.75 : 1, オランダで 2.93 : 1, イギリスで 3.81 : 1 の割合で男児が多い。日本でも数は少ないものの思春期前にジェンダークリニックに来院したケースは、男児が多い。しかし、思春期を迎えた 10 代の青年になると、カナダとイギリスで 1.4 : 1, オランダで 1.2 : 1 と性差が小さくなる（Cohen-Kettenis & Pfäfflin, 2003）。カナダのデータでは、その分岐となるのが 11 歳であり、12 歳以降、年を経るにつれ女子の来院数が加速度的に増加するのである（Wood et al., 2012）。このように、行動評定での性比とクリニック来院者の性比の逆転は、特に思春期前に顕著な現象である。これはどのようなことが要因となっているのだろうか。以下では、思春期前の子どもの性役割行動の非典型性をどう見積もるのかについて整理することでその理由を考える。

2. 子どもの性役割行動の非典型性とは何か

欧米では、GID を精神疾患リストから削除するための運動が盛り上がったが、この 5 月に DSM 5 が出版されリストに残されたまま、「性別違和症」と改変された。さらに小児の場合、スウェーデン政府が自国用に作成している ICD-10 で既に削除されているように、その存在自体が激しい議論を巻き起こしている。小児の GID の論点の 1 つとして、性役割行動の許容限度にコンセンサスが得られていないといった点が挙げられ、Hill ら（2005）は、性役割行動は二分化できないと批判をした。これは、二分法の困難性が立証できれば GID は削除可能だという立場である。

就学前の子どもの遊びや活動に関する典型的性役割行動を親評定で測定する尺度（Pre-School Activity Inventory : PSIAI）では、頑健な二峰性が示される（Golombok & Rust, 1993 ; Golombok et al., 2008）。しかし、男児役割行動の男女の重なりに比べ、女児役割行動の男女の重なりはほぼ見られない（佐々木, 2006）。女児役割行動は男女二分法が成立しやすい指標だといえる。これには男児が女児役割行動を示すことへの周囲の不寛容性が寄与しているのではないだろうか。

上記のことは、クリニックに来院する GID を持つ小児において、男児よりも女児のほうがより極端な異性役割行動を示す（Zucker et al., 1997）こととも通底しているといえる。すなわち、男児は女児より極端な異性役割行動を示していなくても病院に来るのである。女児であれば、病院に行くという選択へと繋がらない程度の異性役割行動でも、男児だと「問題化」されるのだ。なお、GID 基準を満たした子どもに性差はないため、来院した男児が偽陽性（GID ではない）ということはない。

以上、思春期前の子どもの GID の来院者性差の一因として、社会が男児の女児役割行動に不寛容であることが推察される。その後、思春期には性差が小さくなり女子の来院数が増加するため、第二次性徴や性指向など特有の要因が出現してくると考えられる。

3. 性別二元論と GID

異性役割行動に不寛容であること、すなわち学校や社会などの環境が性別二元性を固持することが GID を促進している可能性が示唆された。生物学的にも心理学的にも性別を明確に二分化することは困難であるが、社会は 2 つに分けることを要請する。連続変量で対象を捉える心理学の知見を社会に還元する時機が来ている。

参 考 文 献

- 佐々木掌子・野中浩一・尾崎幸謙・高橋雄介・敷島千鶴・山形伸二・安藤寿康（2009）. わが国における性別違和と異性帰属の得点分布—双生児データによる性同一性障害傾向の有症割合— 日本性科学会雑誌, 27, 49-59.
- 佐々木掌子（2010）. 子どもの性同一性障害—小児期・思春期・青年期の GID に関する研究動向— 三田哲学会誌「哲学」, 第 123 集, 159-184.
- Wood, H., Sasaki, S., Bradley, S., Singh, D., Fantus, S., Owen-Anderson, A., Di Giacomo, A., Bain, J., & Zucker, K. (2012). Patterns of referral to a gender identity service for children and adolescents (1976-2011) : Age, sex ratio, and sexual orientation. *Journal of Sex & Marital Therapy*, 39, 1-6.

話題提供Ⅲ

性差？ ジェンダー？
一発達と教育の心理学の視点と課題一

柏木 恵子

心理学の研究対象とする特性における性差—心理学的性を、どのような問題として捉えるか／捉えるべきかについて、私自身の研究の歩みを述べることで討論のための話題提供としたい。

1. 「性差」を執筆せよ、と提案されて

澤田慶輔（当時東大）教授が「青年心理学」（東京大学出版会）を編まれるに当たって、執筆担当と提案されたのが「性差」で、これが私の「性差」との最初の出会いである。それまで殆ど関心もなく研究もしてこなかった私が、その後、10年ほど集中的にこの課題に取り組むことになった契機である。

2. 「性差心理学」への疑義

そこで勉強し始めて出会ったのが「性差心理学」。そこには、知能、情緒、対人関係、性格など心理学が扱う人間の特性に、どのような性差があるかが書かれ、性差リストのようなものであった。これが心理学！との驚きが私の「性役割」研究の出発点であった。

3. 「性役割」概念の提起とその実証研究へ

性差の存在をいかに精密にリストアップしても、それは心理学ではない、とりわけ発達・教育の心理学の課題ではないと思った。その性差がどのようにもたらされるのか、その起源、それ以上にその発達のメカニズムを明らかにしたいと思った。そのために「社会的性役割期待」の存在、その認知、受容などにおける性差についての一連の実証研究を行ってきた（『教育心理学研究』所収）。

4. 性差と発達のメカニズム

発達のメカニズムを説明する支配的理論は社会化理論であるが、性差の発達もおそらくこのメカニズムに負っている。誕生直後から始まりおとなの世界でも性別による期待や処遇の違い、性ごとに生活体験を変えそこで習得される資質にも差が生じる。これが性的社会化である。その影響は多大である。

しかし、人間は社会化に圧倒される受動的な存在ではなく、自ら発達の主体として発達を方向づけ制御する力を持っている。とりわけ青年期以降の性差の発達を考える上で、発達の自己制御を看過できない。最近諸処でいわれる「女性が元気」「草食系男子の現象」、「アンドロジニーの自尊感情の高さ」などを取り上げ、性役割の受容／自己制御の様相を具体的に考えたい。

参考文献

- 柏木恵子（2010）. 心理的リアリティを掬いあげる研究をめざす—「女性ならではの研究はあるか？」と問われて— 児童心理学の進歩, 49, 224-249.
 柏木恵子（2013）. おとなが育つ条件—発達心理学から考える— 岩波新書

討 論

3つの話題提供それぞれの論旨を司会者が簡潔にまとめた上で、参加者からの質問を受けた。話題提供者との応答を中心にして、以下のような議論がなされた。

1. 生命科学と社会科学との共同作業が望まれること

今回、質問の多くは、帯刀の発表内容である遺伝子の働きや仕組みについてのものであった。その中で、「遺伝子に意志はあるといえるのか」という質問がなされたが、これは、発達における遺伝子の中核的な役割を問うものであった。それに対して、帯刀からは「まだ未知である」との回答がなされた。

この質問に代表されるように、本シンポジウムでは、ジェンダー研究が投げかけてきた根本的な問いの1つである（性別二元性を含む）性・性別の発達の仕組みについて、新たな視点から検討すべき時期にきているという問題提起がなされた。すなわち、性・性別の発達をより深く解明していくためには、遺伝子と環境の相互作用（GxE）についての理解が是非とも必要であること、そのためには、生命科学と社会科学（発達心理学）双方が対話の努力をし、共同作業を具体的に進めていくことが望まれるという提言である。同性愛や性同一性障害などのケースは、そうした共同作業の具体的な題材や対象として好適であることも確認された。

2. 発達の主体の視点を入れる必要性について

発達心理学の立場から、人間は社会化を受けるだけの受動的な存在ではなく、自ら発達の主体として発達を方向づけ制御する力を持つことにもっと目を向けるべきであるという指摘が柏木からなされた。これは、発達の規定因に発達の主体としての人（Person）を組み込んで、発達を、遺伝子、環境、人（自己）の相互作用（GxExP）としてとらえるべきであるという主張である。発達はGだけではなく、Eとの相互作用であるというエピジェネティックな仕組みに、さらに、Eを選択するPを考えるべきだということである。性差・性別の発達を考える上でも欠かせない視点だといえよう。

なお、今回のシンポジウムのテーマについて、「か

なり理論的，研究的なトーンが強いが，いわゆるジェンダー問題における教育実践や運動などとの関係はどのように考えればよいのか」という質問が参加者からなされた。それに対して，「運動や教育実践はジェンダー問題の基本路線としてさらに進展していくことが

望まれるが，それと連動・並行して，ジェンダーについての根本的な知識や理論的理解を持つこともまた重要であり，これについての研究がより進められていくことが望まれるだろう」との説明が司会者からなされた。